

科学と社会委員会（第24期・第7回）
議事次第

1. 日 時 平成30年10月4日（木） 12:00～13:00

2. 会 場 日本学術会議5階 5-C（1）会議室

3. 議 題

- (1) 科学と社会企画分科会からの報告と課題
- (2) 提言等の見える化について
- (3) 主張が異なる提言や報告の対応について
- (4) アジア学術会議の科学と社会委員会セッションについて
- (5) 今後の活動について
- (6) その他

(添付資料)

資料1-1	科学と社会企画分科会設置要綱及び委員名簿・・・・・・・・・・	1
1-2	「日本の展望」に続く日本学術会議の提言に関する全体の進め方について（案）・・・・・・・・・・	3
資料2-1	インパクト・レポート様式改訂前後・・・・・・・・・・	5
2-2	インパクト・レポートの広報について・・・・・・・・・・	8
2-3	提言等が広く読まれるための施策について・・・・・・・・・・	9
資料3	高橋幹事資料	
資料4	アジア学術会議における科学と社会委員会及び若手アカデミー合同セッション趣旨書案・・・・・・・・・・	10
資料5	副会長報告「科学と社会に関する活動報告」（抜粋）・・・・・・・・	12
参考資料1	前回議事要旨等・・・・・・・・・・	16
参考資料2	日本学術会議の意思の表出の政府内への周知方法について・・・・・・・・	22

資料 1 - 1

科学と社会委員会分科会の設置について

分科会等名： 科学と社会企画分科会

1	所属委員会名 (複数の場合は、主体となる委員会に○印を付ける。)	科学と社会委員会
2	委員の構成	委員会の7名以内の委員並びに会員又は連携会員若干名
3	設置目的	世界の社会的課題を国連の持続可能な開発目標 (Sustainable Development Goals: SDGs) への日本学術会議の取組み、アジア学術会議等多くの国際会議における議論の企画、意見の異なる提言等への対応及び学術の未来像を社会との関係で検討すること等について審議し、基本的な考え方を整理するために設置する。
4	審議事項	1. SDGs への日本学術会議の取組み 2. アジア学術会議等の国際会議における議論の企画 3. 意見の異なる提言等への対応 4. 学術の未来像の社会との関係 5. 科学と社会委員会から検討を求められたことに係る審議に関すること
5	設置期間	平成30年8月22日～平成32年9月30日
6	備考	※24期にて初設置

第 24 期 科学と社会委員会
科学と社会企画分科会委員名簿

平成 30 年 9 月現在

	氏 名	所属・職名	備 考
委員長	渡辺美代子	国立研究開発法人科学技術振興機構副理事	第三部会員
副委員長	高山弘太郎	愛媛大学大学院農学研究科教授、豊橋技術科学大学先端農業・バイオリサーチセンター特任教授	連携会員
幹事	藤原 聖子	東京大学大学院人文社会系研究科教授	第一部会員
幹事	川口 慎介	国立研究開発法人海洋開発研究機構研究員	連携会員
	遠藤 薫	学習院大学法学部教授	第一部会員
	三成 美保	奈良女子大学副学長・教授	第一部会員
	沖 大幹	東京大学国際高等研究所サステイナビリティ学連携研究機構教授	連携会員
	高瀬 堅吉	自治医科大学大学院医学研究科教授	連携会員
	西嶋 一欽	京都大学防災研究所准教授	連携会員

資料 1－2

「日本の展望」に続く日本学術会議の提言に関する全体の進め方について（案）

2018/9/24 科学と社会企画分科会

1. これまでの経緯

- 2018/4 総会 日本の展望につづく未来像の提言を今期作成することを決定
- 4/26 幹事会懇談会 黒川元会長による「日本の計画」と「日本の展望」の検討経緯説明
- 7/25 四役会議 山極会長の方針のもと、体制づくりの前に未来を担う若手アカデミーの提案を最初に受けて検討すること
- 8/22 幹事会 科学と社会委員会 科学と社会企画分科会でこの検討を行うこと
- 9/12 幹事会 最初の科学と社会企画分科会の検討結果をもとに、10月幹事会にて全体進め方を本分科会より提案すること
- 9/14 科学と社会企画分科会 日本の展望に続く提言の骨子案を議論し策定

2. 基本方針

- ① 「学術界のための学術界からの提言」ではなく「日本の（社会的）宿題を解決して未来社会をつくるための学術界からの提案」に焦点をあてる、ここで言う「宿題」とは日本が近い将来後戻りができない決定的破綻をきたすことを避けるための課題であり、これまで積み残して解決が望まれる課題を指す。
- ② 「社会的課題のための学術」と「（社会的課題を踏まえた）学術自体」の2本柱として検討を進める。
- ③ 「日本国内の課題」に焦点を絞る、ただし課題解決のための内容にはすべて国際関係を含め独立させない。
- ④ 多くの人が受け入れられながら、芯のある主張を目指す。
- ⑤ 学術会議関係者以外の共感を得ることを目指す。
- ⑥ 未来を担う若手アカデミーの意見を尊重する。

3. 内容の骨子

- ① 分野横断を基本とし、各部と分野別委員会に閉じた内容にはしない。
- ② 提言を出す対象は、政府（学術政策に関わる行政官）、市民（中高生からシニアまで世代を分けて検討）、産業界、メディアとする、議論では各対象との対話を重視する。
- ③ 提言は日本の展望2010にないものを中心に記述し、日本の展望2010の内容で参考情報にできるものは参考として記述する。
- ④ 「Society 5.0」や「SDGs」を実現するために、日本の社会に特化して目標設定の仕方を調整し、全体として目ざすべき社会ビジョンを示す。
- ⑤ 提言完成後の各対象向け発信方法を検討する、動画やSNS、TV放映などによる普及を実施する。
- ⑥ 海外にも積極的に発信する。

4. 体制

- ① 責任者は山極会長とする、国際関係は武内副会長が統括する。
- ② 幹事会で全体を議論し、必要に応じて幹事会附置委員会を設置する。
- ③ 科学と社会委員会の分科会で「社会的課題のための学術」を、科学者委員会の分科会で「(社会的課題を踏まえた) 学術自体」の議論を進める、両分科会はその議論を②に提案する役割を持つ。
- ④ 会長は③における分科会のアドバイザーとして必要に応じて分科会に参加する、また国際関係については武内副会長から適宜アドバイスを受ける。

5. スケジュール

2018/10/3 幹事会 基本方針、体制、全体スケジュールの議論と決定

10 月 体制づくり (委員会設置等)

11 月～ 本格的議論開始

2019/ 4 月総会 全体骨子提示+議論

6-8 月 学術フォーラム (第 1 回) にて議論

10 月総会 提言案骨子提示+議論

11-12 月 学術フォーラム (第 2 回) にて議論

2020/ 4 月総会 提言案提示+議論

6 月頃 提出

8 月頃 公開

6. 提言の内容第 1 次案

タイトル：日本の宿題－学術からの提案 2020－

(Tuning for sustainable society in 2020 and beyond)

構成：

- ① 総論 幹事会で検討

下記の総括 (関連付け) と全体に共通する重要課題についてのまとめ

- ② 日本社会と学術の展望 科学と社会委員会で検討 (企画分科会中心)
- ③ 日本の学術の展望 科学者委員会で検討

社会的課題の分類

- ① いのち：人間そのもの (人口、人権、労働、医療など)
- ② 食：人間と自然の共生 (水産、農業、食品など)
- ③ くらし (住)：人間と人工物の関わり (エネルギー、社会インフラ、地域、防災、文化など)

(勧告等)「〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇」
インパクト・レポート

- . ○○
○○。
- . ○○
○○。

平成〇〇年〇〇月〇〇日

- (1) 政策
- (2) 学協会・研究教育機関・市民社会等の反応

- ・ △△新聞（平成〇〇年〇〇月〇〇日朝刊）社説
- ・ □□新聞（平成〇〇年〇〇月〇〇日朝刊）科学欄

インパクト・レポート作成責任者
〇〇委員会委員長 〇〇〇 〇〇

6

(c) 期待したインパクトは得られなかった

○○○。

インパクト・レポート作成責任者

〇〇委員会委員長　〇〇〇　〇〇

インパクト・レポートの広報について

現状：幹事会資料の一部として学術会議 HP で公開されているのみ。

検討事項：

①インパクト・レポートの積極的な公表（広報の一環として）が必要かどうか。

②積極的に公表する場合の方法

【案1】 青四角が「ポイント」。赤四角を「インパクト」として新設。

HOME > 日本学術会議とは > 提言・報告等 > 一般公開イベント > 委員会の活動 > 地区会議の活動 > 国際活動 > 会員・連携会員等 > 協力学術研究団体					
日本学術会議 トップページ > 提言・報告等 > 提言					
提言・報告等【提言】					
※ファイルはすべてPDF形式です。					
2017 2016 2015 2014 2013 2012 2011 2010 2009 2008					
2018					
決定（公表）年月日	PDF	名 称	表出の主体	議決された会議	
2018-9-13		社会的つながりが弱い人への支援のあり方について—社会福祉学の視点から—	社会学委員会 社会福祉学分科会	第268回幹事会	
2018-8-16		研究と産業に不可欠な中性子の供給と研究用原子炉の在り方	総合工学委員会 原子力安全に関する分科会	第265回幹事会	
2018-1-22		生物多様性条約及び名古屋議定書におけるデジタル配列情報の取扱いについて （英訳） The treatment of Digital Sequence Information with respect to the Convention on Biological Diversity and the Nagoya Protocol	基礎生物学委員会・統合生物学委員会・農学委員会・基礎医学委員会合同遺伝資源分科会、農学委員会・食料科学委員会合同農学分野における名古屋議定書関連検討分科会	第258回幹事会	

【案2】 「インパクト・レポート」サブページを新設。


日本学術会議
 SCIENCE COUNCIL OF JAPAN

[お問い合わせ・ご意見](#) > [サイトマップ](#) > [English](#)

[HOME](#) > [日本学術会議とは](#) > [提言・報告等](#) > [一般公開イベント](#) > [委員会の活動](#) > [地区会議の活動](#) > [国際活動](#) > [会員・連携会員等](#) > [協力学術研究団体](#)

[日本学術会議 トップページ](#) > [提言・報告等](#)

提言・報告等

年で探す
 期で探す

答 申
 回 答
 勸 告
 要 望
 声 明
 提 言

提言・報告等
 日本学術会議は発足以来、政府に対する多くの勧告・答申及び科学技術に関する意見の発表などを行い、成果を上げています。

答申
 「答申」とは、専門科学者の検討を要する事柄についての政府からの問いかけに対する回答です。
[答申の一覧を表示する](#)

回答
 「回答」とは、関係機関から審議依頼（政府からの問いかけを除く。）事項に対する回答です。
[回答の一覧を表示する](#)

勧告
 「勧告」とは、科学的な事柄について、政府に対して実現を強く勧めるものです。
[勧告の一覧を表示する](#)

要望
 「要望」とは、科学的な事柄について、政府及び関係機関等に実現を望む意思表示をするものです。
[要望の一覧を表示する](#)

提言等が広く読まれるための施策について

現状：

- ・全ての提言等に対して：学術会議 HP にて公表。幹事会決定（平成 22 年 2 月 25 日）に基づき、各省に配布。
- ・他に実施されている方法
 - ・作成者等が特定個人・団体にメール等で送付。
 - ・プレス・リリース
 - ・作成者等がフォローアップ的シンポジウムを開催し、提言等を紹介する。
 - ・SDGs など、社会的関心が高いキャンペーンやプロジェクトに結びつけて広報する。

これまで（あまり）実施されていない方法：

- ・作成者が名宛人の官公庁の部局を訪問し、提言を示しながら要望を直接伝える。
- ・動画にして YouTube にアップするなど、多くの人が閲覧するサイトに、こちらから乗り込み宣伝する。（動画作成費用の問題）
- ・研究者内外の“インフルエンサー”に、Twitter 等で宣伝してもらう。
- ・学術会議の Twitter でも紹介してもらう。
- ・入試等での活用。
- ・英語による広報。（例：大学問題関係では World University News 等に投稿可能）

The 18th Science Council of Asia Conference

Joint session organized by Committee of Science and Society and Young Academy of
Japan, SCJ

Date and time: December 6, 2018, 16:00–17:30

Place: Main hall, Science Council of Japan, Tokyo, Japan

Session title: Beyond SDGs - Under the era of the Anthropocene—

Session abstract:

The “Transforming our world: the 2030 Agenda for Sustainable Development” (Agenda 2030) states in its preamble that this agenda is for people, planet and prosperity, and, among others, aims that all human beings can enjoy prosperous and fulfilling lives. The 17 goals listed in the SDGs are not the ultimate goals by themselves. Rather, these goals should be seen as milestones, and the achievement of these goals should lead to the realization of the world that the 2030 agenda is primarily heading for. It should be also emphasized that the SDGs do not cover entire vision of the 2030 Agenda.

This session aims at opening wider discussion on how science and academia can contribute to the realization of the world that the 2030 Agenda is heading for and is yet not explicitly addressed in the SDGs. Through the discussion the session also aims to draw a picture after 2030; suggesting that design of post SDGs should be now initiated.

To facilitate such discussion, four speakers are invited to provide lectures. These lectures are related to “co-existence with others,” which is believed to be one of the essential elements in prosperous and fulling lives. Each lecture provides insights on possibilities of science and academia to contribute to the co-existence with others in different contexts. Following the lectures, a panel discussion is held to discuss about the contribution of science and academia for “Beyond SDGs.”

Session format: four lectures and a panel discussion

Session organizers:

Chair: Miyoko O. Watanabe¹

Panel discussion facilitator: Taikan Oki²

Commentators: Kaoru Endo³, Kazuyoshi Nishijima*

Lectures:

1. Speaker: Prof. Juichi Yamagiwa (President of Kyoto University,

President of SCJ)*

Title (tentative): Co-existence between human society and wildlife society

2. Speaker: Prof. Dwikorita Karnawati⁴ (Former President, Gadjah Mada University, Indonesia),

Title (tentative) :Living with natural disasters

3. Speaker (in contact): Prof. Sharifah Zarina Syed Zakaria (Institute for Environment and Development (LESTARI), Malaysia)*

Title (tentative): Sustainability in Education Towards Global Citizenship

4. Speaker: TBD⁵

Title: TBD

Candidates (in contact):

- Mr. Toshiyuki Inoko (Team LAB): CEO/artist on digital arts
- Ms. Sptuniko! (The University of Toyo): Researcher/artists
- Ms. Eriko Aiba (The University of Electro-Communications): Pianist/Scientist, research on perfect pitch

Commentators:

1. Dawnhee Yim (Korea)*: Folklore Studies
2. Ms. Mriduchhanda Chattopadhyay* (India): Economics PhD course in Waseda University
3. Michiharu Nakamura⁶ (Senior Advisor of JST, A member of UN 10-member group)
4. Kaoru Endo³
5. Kazuyoshi Nishijima*

*: Speakers at the other sessions

_: fixed

副会長報告 科学と社会に関する活動報告より抜粋

2018年4月～2018年9月の活動



2018年10月3日

「政府・社会・国民との関係」担当副会長
渡辺美代子

1

科学と社会委員会と分科会の活動

委員会（委員長：渡辺美代子）

- ・第23期提言とSDGsとの関係づけ→学術会議HPで紹介（日英）
- ・アジア学術会議におけるセッション企画

科学と社会企画分科会（委員長：渡辺美代子）

- ・若手アカデミー、科学者委員会との連携
- ・日本の展望に続く2020提言の検討（若手アカデミーからの提案をもとに）

市民と科学の対話分科会（委員長：遠藤薫）

- ・サイエンスカフェによる市民との対話
2017年10～2018年9月：18回実施
テーマ：遺伝子、自動運転、選挙制度、食、重力波など
地方開催：11回（大崎（宮城）、松山、竹原（広島）、松江、那覇など）
- ・「科学と市民の対話」のあり方、外部との連携（文科省、未来館）を検討

メディア懇談分科会（委員長：渡辺美代子）

- ・メディア関係者への話題提供のあり方を議論
- ・課題別委員会などの発信要望とメディア関係者要望の抽出

政府・産業界連携分科会（委員長：山極壽一）

- ・大学と産業界の対話から課題の解決策を議論
- ・提言案を作成（大学のあり方、新産学連携、国際的存在意義、人文学中心の戦略）

2

積極的に進めるべき

- ✓世界共通の課題を学術会議が取り組む必要
- ✓地球規模の課題に取り組む際の共通言語として使用
- ✓研究が社会にとってどういう意味があるかが問われる際、その正当化に使える
- ✓研究者が研究の意義を考え、語るための手段と捉えるべき

批判的であるべき

- ✓SDGsであれば誰も文句を言えなくなるような方向を懸念すべき
- ✓政府主導の潮流に単に取り込まれないように注意
- ✓学術が縛られるのは問題

提案

- ✓日本らしいもの、日本らしいやり方を提言できるとよい
- ✓17目標に該当しない課題を拾うべきではないか（芸術、スポーツなど）
- ✓何をすべきから考え、分野横断で課題設定を考える必要
- ✓社会実装を目指す研究の場合は、物差しとして使えば良い
- ✓これからの提言だけでなく、過去の提言の振り返りを行う必要
- ✓提言作成時にSDGsとの関係を紐付ける



3

学術会議HPにSDGsと提言等との関係を掲載



日本語掲載：5月29日
英語掲載：9月4日

なお、できる限り多様な提言をご紹介するために、1提言につき1目標を割り当てていますが、ほとんどの提言は複数の目標に関係しています。

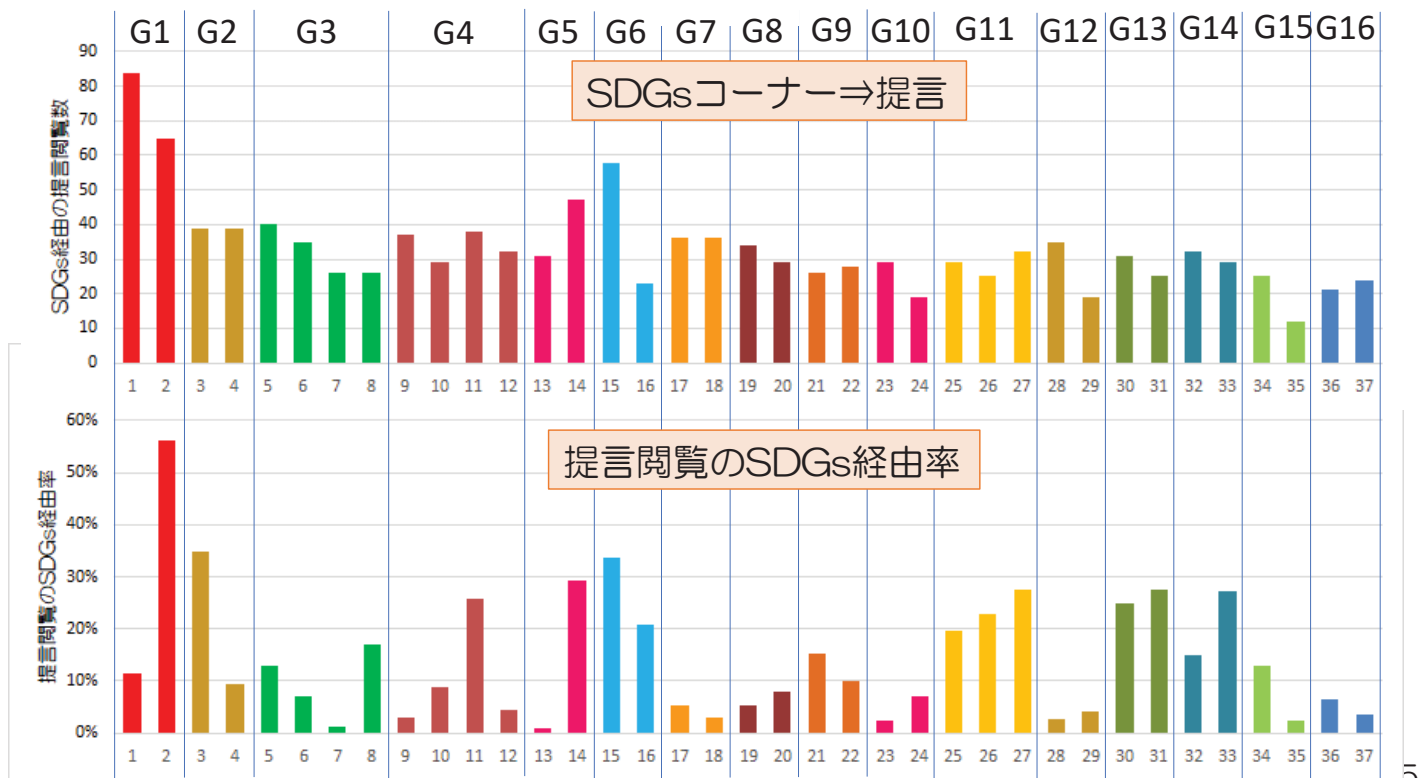
「持続可能な開発目標（SDGs）」とは：
2015年9月に国連総会が決議した「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」が掲げた目標。
詳細は国連広報センターHPをご覧ください。



2018年5月28日～8月31日のアクセス数

SDGsコーナーユーザー数：2,161人（閲覧数：4,417回）

ここから提言：1,225人（57%）



提言とSDGsの関係をテキストマイニングで分析

第三部総合工学委員会による分析

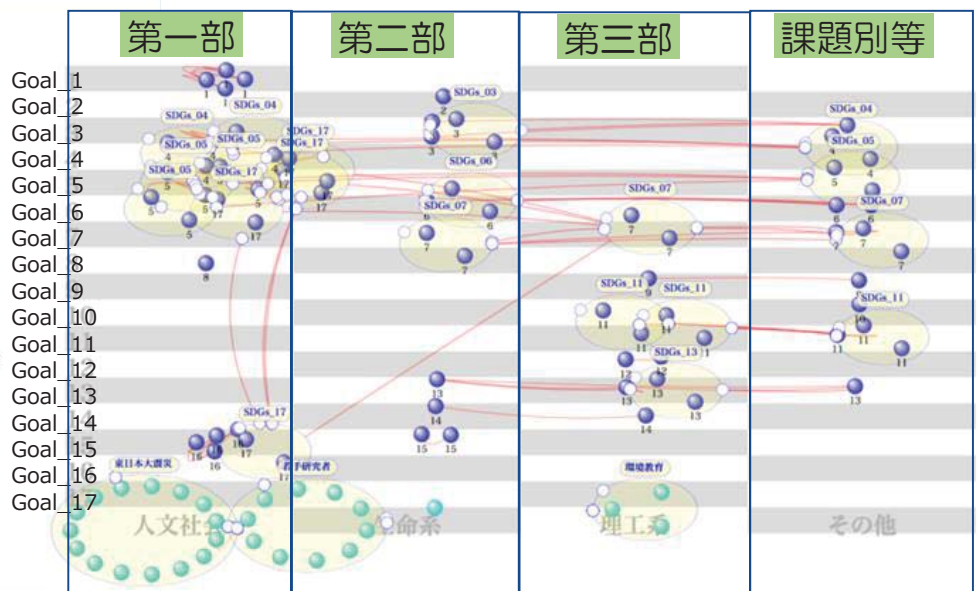
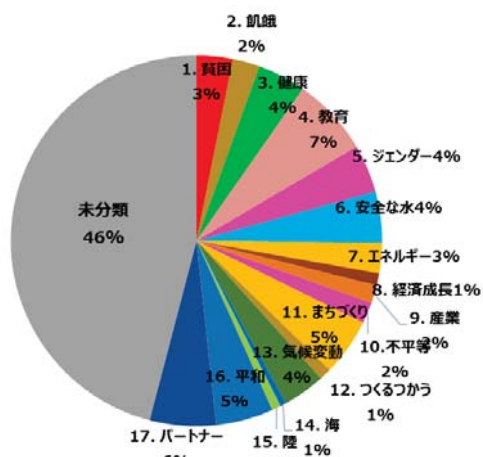
方法：各文書における単語の使用有無をベクトル値に変換

MIMAサーチで提言全文を検索・分析し、SDGsとの関係を可視化

対象：2010年度以降の提言285件

各部提言とSDGsの関係

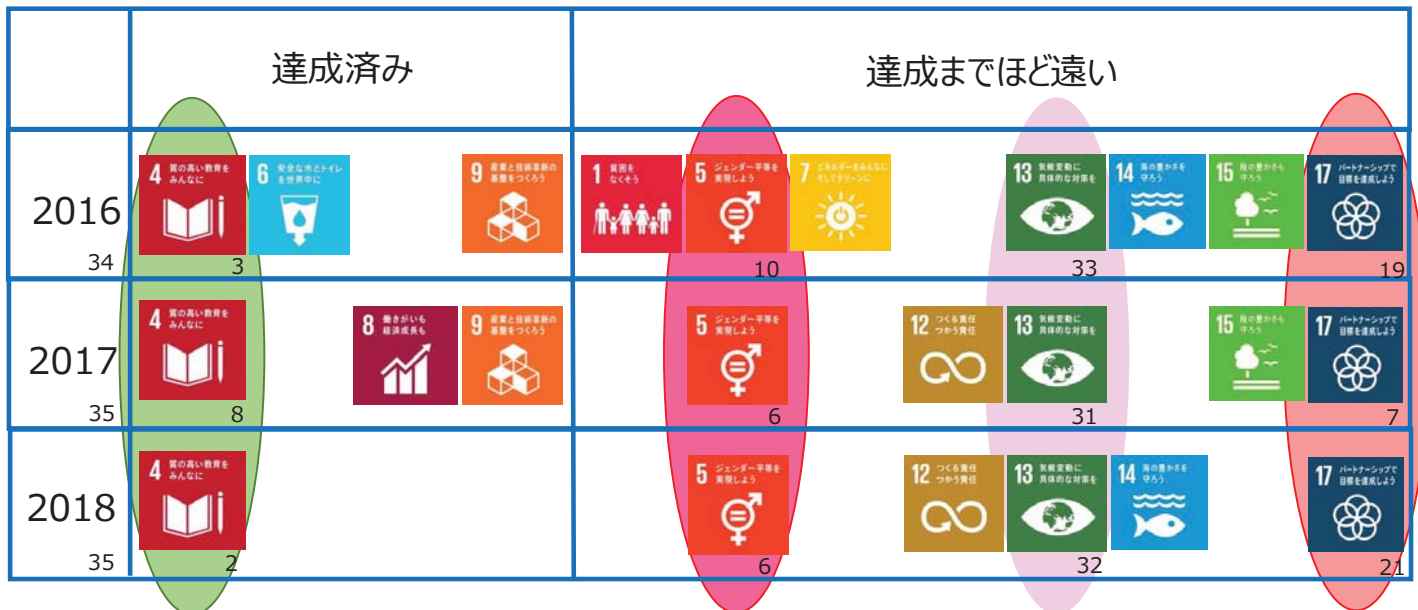
提言とSDGsの関係



SDGs日本の達成状況変化

資料5

SDG Index and Dashboards Report 2016-2018 (OECD国のSDGsの17目標に対する達成状況)



科学と社会委員会（第24期・第4回）議事要旨

1 日 時 平成30年7月6日（金） 15:00～17:55

2 場 所 日本学術会議5階 5-A（2）会議室

3 出席者 渡辺 美代子（副会長・委員長）、小林 傳司（第一部会員・副委員長）、
小安 重夫（第二部会員・幹事）、高橋 桂子（第三部会員・幹事）、
遠藤 薫（第一部会員）、藤原 聖子（第一部会員）、松浦 純（第一部会員）、
西村 いくこ（第二部会員）、古谷 研（第二部会員）、中村 崇（第三部会員）、
沖 大幹（連携会員）、蟹江 憲史（連携会員）
（説明者）川口 慎介（連携会員）、岸村 顕広（連携会員）、西嶋 一欽（連携会員）、
（欠席） 甲斐 知恵子（第二部会員）平井 みどり（第二部会員）、坪井 俊（第三部会員）、
藤井 良一（第三部会員）、新福 洋子（特任連携会員）
（事務局） 桑川参事官、酒井参事官補佐、鳥生審議専門職、奥野審議調査専門職

4 議事要旨

（1）若手アカデミーのSDGsの取り組み紹介

●若手アカデミーの会員である岸村委員、西嶋委員及び川口委員より紹介があった。要旨は以下のとおり。

- ・従来の分野別では解決困難な課題に柔軟に対応するため、若手アカデミーの下に4つの分科会①若手による学術の未来検討分科会、②若手科学者ネットワーク分科会、③イノベーションに向けた社会連携分科会、④国際分科会を設けている。分野別では困難な課題、特にSDGs等の複雑な課題、既存の枠組みでは解決しにくい課題に取り組む場合には、力を発揮できる。
- ・昨年9月に、SDGsについて考える集会を23期の若手アカデミー副代表である狩野光伸先生が開催し、学者だけではなく高校生や様々なステークホルダーの人たちが集まった。SDGsと学術を進めるためにこういったものが必要かの議論を行っており、同年12月にフォローアップのワークショップを開催した。
- ・SDGsを持続的に進める上では、国際的な文脈での持続性の観点からのグローバルな協力、地域間での連携と国内の持続性の観点からの人材育成、地方創生がある。
- ・諸外国との連携では、グローバルヤングアカデミー（GYA）、各国若手アカデミー（NYAs）との集まりがあり、SDGsの絡みから若手アカデミーがどのように貢献できるか、科学的助言、科学コミュニケーションや若手科学者トレーニングして行くにはどうしたらよいか等の声明が出されている。問題意識としては、日本の若手アカデミーも賛同して活動している。また、アジアでの各国若手アカデミーとの連携も強化しており、我々が積み上げてきた歴史・経験を伝えて、彼らの持続性にも貢献できると考えている。
- ・若手アカデミーの国際関係イベントとしては、国際分科会が正式に動いているが、アジアで若手アカデミーとの連携をするような会議とか、ワークショップを3月に開催し、韓国若手アカデミー（Y-KAST）と交流をした。また、GYA、INGSAとの共催で、11月にイベントとして能力開発ワークショップを行うこととしている。
- ・イベントの運営や参加するための経費が掛かり、こういったものに使える予算が十分でないという問題がある。GYAはドイツから安定的にfundが出ているが、適宜お金集めをしている。また、他の国の若手アカデミーでも独自にfundを集めている。我々もSDGsと関連して何か予算が取れないか議論しているところである。
- ・SDGsを遂行するためには人材の育成が必要であるが、博士課程を卒業した後どこに

行ったか分からない人たちをどうするか。最終的には、産業界が、メッセージとして、高い専門性、案件遂行能力を有する人材を雇用することが考えられる。アカデミアとしては、高い専門性、案件遂行能力を有する人材を創出するということを、産業界とアカデミアの協働声明として若者へ提示したい。

- ・学部生 250 万人、大学院修士課程 16 万人、大学院博士課程 7 万人、ポスドク 7 万人と少なくなっているのが現状である。
- ・未来分科会で学振PDの倍増を提案しているが、現在、ポスドク 15,000 人、学振PDは 1,000 人しかおらず、全体の 10% を切っている。現状もっともフェアなポスドク審査制度であり、ここを拡充するということは多くの若手に納得できる支援であると考えている。
- ・学振PDは、ポスドクそのものの研究テーマで取り組めるので、本邦の研究の多様性が高くなる。我が国の中で行われている研究の多様性を高く保つためにも非常に良い。
- ・必要経費として、約 5 百万円/人/円、1 年間で採用される人間が 350 名、これを 2 倍して 700 名とすると、約 20 億/年、科研費 2,000 億円/年の 1% でも回せば、サステナブルなアカデミーができ、SDGs を進めることができる。
- ・若手から、アカデミアに残らない人の選択肢、通年雇用、企業の大学講座が短期的思考に基づいている現状の打破などの課題をシニアが考える必要性の提案があった。

(2) FEとSDGsについて

●蟹江委員より、資料により説明。要旨は以下のとおり。

- ・フューチャーアースとは、持続可能な地球社会のための知を生み出す国際的研究連携のプラットフォームということで、研究に非常に重点が置かれている。対象は、地球環境の変化というフィジカルなものと、その中にいる人間と両方を対象として、そのインタラクションというものも関連している。そういう意味で対象はかなりSDGsとオーバーラップしている。
- ・フューチャーアースは研究者中心、SDGsは政府中心に進められていると言える。
- ・活動としては、人文社会科学、自然科学の連携・統合をしていこうというのが目的として一つあり、その上で社会との知の共創と共有による複合的な課題解決というのがある。そういう意味でステークホルダーとの超学際的連携をしていて、design の段階から production していき、最終的に成果を生かすというところまで含まれるということを考えると、例えば、産業界との連携というツールもあり、NGO等をツールとして考えるというものもある。その過程でコラボレーションも大事である。中身の部分で、かなりSDGsがツールとして活用できるというところがある。
- ・フューチャーアース自体、国際的な研究計画がエラボレートして、結果、出来たものである。SDGsは、2011年にアイデアを出して、2012年に実際に創ろうという話になり、2年間の考証があり、一年後まとめ上げ2015年に創ったというプロセスだが、その辺りのプロセスもかなりオーバーラップしている。
- ・また、SDGsを創るプロセスでは、科学的な知見を1年ぐらいかけてネゴシエータにレクチャーし続けていたが、そこで相談していた人にはフューチャーアースの活動に関連している人が多く含まれていた。フューチャーアースのいう科学と政策のコラボレーション、インタラクションといったところが、いいタイミングで出てきたのが、SDGsの場ではなかったかと思っている。
- ・国際的な事務局が、カナダ、アメリカ、スウェーデン、フランス、日本とあって母体となっている。日本は学術会議が母体となっており、実際に設置しているのは、東京大学のIR3Sとなっている。また、地域の事務局としては、アジアの事務局として京都の地球研となっている。

- ・個別のプロジェクトとフューチャーアースの活動というのは、結構、最初からどういう関係にあるのかというのが分かりにくくなっていて、フューチャーアースが、当初はいろいろなことをやってくれるはずなのに、何もやってくれないという不満が出ているような現状がある。
- ・SDG s に関しては、課題ができてから、オプションを出し、評価し、実施していくと、最終的に目標に至って、どれだけ進捗しているかモニタリングし、レビューしていくという点があるが、いろいろなサイエンスが関係して、その中のステークホルダーの一つがフューチャーアースといってもいいのではないかなと思う。

* 学術会議におけるSDG s 関連委員会・分科会の関係の図について、分かりにくいとの意見があり、渡辺委員長より、完成版でなくてよいので、たたき台となるような図を次回までに各委員から提案頂きたい旨依頼があった。

(3) SDG s と提言の紹介

- ・渡辺委員長より、学術会議のホームページで、「SDG s とのかかわりー第23期に発出した提言・報告書を中心にー」として提言等を掲載しているが、これらの提言等について英語版の要望が多方面からあるので、その作成にあたっては、各提言等を作成している委員会等にタイトルと委員会等名の英語版を依頼したいとの発言があった。
- ・ホームページ掲載では、1 提言につき1 目標を割り当てているが、他の提言も見られるよう対応したい。また、今後出す提言については、1 提言複数目標を割り当て、その関係がわかるようにするのがよいとの意見があった。
- ・SDG s の関係から、提言等を出してもらう場合のチェックシートに、SDG s の分野に関与するか、英文タイトルはあるかということの追加を検討することとなった。
- ・本委員会として、SDG s がフォローしている以外の部分について提言して行くこととなった。
- ・SDG s 取り組みの意義の1 つには学術会議の体質改善がある。分野別委員会がその分野の必要性を訴えることが中心であった従来から、分野を超えて課題を検討し提言することの比重を増やすことを体質改善とすべきとの発言があった。

(4) SDG s の最近の動向について

- ・個別の議論なし。

(5) 提言のチェックシート及びチェックシートの変更について

- ・課題別審議等査読分科会において、検討することで了承された。

(6) アジア学術会議におけるセッション企画について

- ・渡辺委員長より、今回の委員会の場で議論する時間がないので、メンバーから手を挙げてもらい、そのメンバー（遠藤委員（第一部会員）、沖先生（連携会員）、西嶋先生（連携会員））で打ち合わせをし、SDG s の次に来るもの、SDG s では捉えることのできないような学術として大事な課題は何かということセッションで行うことを考えている旨の報告がされた。

(7) 主張が異なる提言や報告の配慮や調整について

- 資料6 の質問状で指摘されている通り、一つのことについて異なる意見の提言等が出てくる場合がある。学術会議として、今後、このように対してどう対応すべきかについて審議がされた。要旨は以下のとおり。

- ・研究の世界では、主張が異なることは当たり前にある。従って、個人的には、学術会議としては、仮に主張がぶつかっても、それぞれが独自の提言等を出していいのではないかと考えているが、それでは問題があり、無理矢理一つの提言等に統合し、結果として間違っていた場合は謝罪する、という考えもある。様々な観点がある課題であり、いろいろ議論しないといけないと思っている。
- ・査読の段階で、チェックを厳しくすべきであり、提言等のチェックシートの「9. 既出の提言等との関係」に、既出の関連提言等の具体的情報を記載するなどしつつ、提言等を世に問うという形しかないと思う。
- ・チェックシートに既出の関連提言等を書いて欲しいと言っても、学術会議が発出している提言等は非常に多い。その提言等が扱ったテーマに関連する過去の提言等を洗い出すのは現実的には難しいのではないかと。
- ・本件については、本委員会で継続審議することとされた。幹事会附置委員会「危機対応科学情報発信組織準備委員会」との整合も必要であり、その委員長である高橋幹事が中心となって検討することとなった。

(8) 今後の委員会検討体制について

- ・「日本の展望」の2020年版の作成に当たって、本委員会と若手アカデミーと連携し、議論するため、本委員会に新たに分科会を設置することが提案され、了承された。
- ・提言等のチェックは課題別審議等査読分科会で行うことになるので、当該分科会を10月総会中に開催することが提案され、了承された。

(9) サイエンスアゴラ2018の後援に係る審議付託について

- ・特に問題なく、後援を行って良い旨が了承された。

(10) その他

- ・次回、総会時の10月4日（木）12時から13時30分に開催することとし、次々回は、12月6日（木）13時から15時30分に開催することとされた。
また、当日アジア学術会議が開催され、16時から本委員会の主催セッションが行われるため、委員への出席依頼が行われた。

以 上

科学と社会委員会（第24期・第5回）議事次第

1. 日 時 平成30年8月9日（木）

（※会則第31条による委員会における議決方法の特例により、メール審議を行った）

2. 審議内容

提案1 科学と社会企画分科会の委員候補について

科学と社会企画分科会の委員候補を、下記案の通り、幹事会に提案することを了承してよろしいか伺います。

（委員候補案）

・科学と社会委員会委員より

遠藤薫、沖大幹、藤原聖子、渡辺美代子

・科学者委員会委員長

三成美保

・若手アカデミー構成員より

高瀬堅吉、高山弘太郎、西嶋一欽、川口慎介

3. 結果

提案1について原案のとおり承認され、幹事会に提案されることとなった。

科学と社会委員会（第24期・第6回）議事次第

1. 日 時 平成30年8月10日（金）

（※会則第31条による委員会における議決方法の特例により、メール審議を行った）

2. 審議内容

提案1 サイエンスアゴラ2018内セッション「超スマート社会とSDGs」の開催について

3. 結果

提案1について原案のとおり承認され、幹事会に提案されることとなった。

●日本学術会議の意思の表出の政府内への周知方法について

平成 22 年 2 月 25 日
日本学術会議第 90 回幹事会決定

日本学術会議の意思の表出の政府内への周知方法については、以下のとおり取り扱うこととする。ただし、会長が必要があると認める場合には、以下にかかわらず、別の取扱いをすることができるものとする。

意思の表出の種類	周知方法
勸告	・会長より、内閣総理大臣に対して、手交（手交の際は内閣総理大臣宛て会長名の公文書を添付する。）。 ・会長より、各大臣（内閣総理大臣を除く。）宛て、公文書を添付し配付。 ・事務連絡により、内閣官房副長官、内閣官房副長官補（内政）、内閣総務官及び各省に配付（会長がこれらに準ずると認める配付先がある場合には、当該配付先にも併せて配付するものとする。）。
要望 声 明	・会長より、各大臣宛て、公文書を添付し配付。 ・事務連絡により、内閣官房副長官、内閣官房副長官補（内政）、内閣総務官及び各省に配付（会長がこれらに準ずると認める配付先がある場合には、当該配付先にも併せて配付するものとする。）。
提 言 報 告	・事務連絡により、各省に配付（会長がこれに準ずると認める配付先がある場合には、当該配付先にも併せて配付するものとする。）。
答 申	・会長より、諮問者に対して、答申を手交（手交の際は諮問者宛て会長名の公文書を添付する。）。 ・必要に応じ、事務連絡により、各省に配付（会長がこれに準ずると認める配付先がある場合には、当該配付先にも併せて配付するものとする。）。
回 答	・会長より、審議依頼者に対して、回答を手交（手交の際は審議依頼者宛て会長名の公文書を添付する。）。ただし、審議依頼者が大臣、副大臣及び大臣政務官（会長がこれらに準ずると認める者を含む。）のいずれでもない場合には、審議依頼者あて会長名の公文書を添付し、配付することで代えることができる。 ・必要に応じ、事務連絡により、各省に配付（会長がこれに準ずると認める配付先がある場合には、当該配付先にも併せて配付するものとする。）。

※ G8 学術会議の共同声明等については、勸告の取扱いに準じる。

附 則

この決定は、決定の日から施行する。

(参考)

内閣府内における配付先は、意思の表出の種類にかかわらず、以下のとおりとする。ただし、会長が必要があると認める場合には、以下のほか、その他の関係部局等に対し配付するものとする。

特命担当大臣（科学技術政策）

日本学術会議を担当する副大臣

日本学術会議を担当する大臣政務官

事務次官

日本学術会議を担当する内閣府審議官

官房長

大臣官房総括審議官

大臣官房総務課

大臣官房企画調整課

総合科学技術会議有識者議員

政策統括官（科学技術政策・イノベーション担当）